



第23号

さらしな^の里

友の会だより



2010・秋



金井実さんと耕作している棚田。田起こしに使った金井家伝来の三又みつまたをかついでもらいました

耕作者の多くが羽尾から

私の耕作している姨捨棚田は「日本の棚田百選」に選ばれています。また「田毎の月」でも有名です。棚田の水田の場所は、旧更埴市（現千曲市）ですが、耕作しているのは八割方が、旧戸倉町羽尾地区在住の人たちです。

この姨捨棚田は全国でも珍しい「ガニセ」が設けられています。ガニセとは田んぼの水はけをよくするために田の床土の下、五十センチくらいの深さに石で囲ってつくった水路です。上の田から降りてきた水を田の畦畔けいはん側につくったヨケと呼ばれるスペースで受け止め、その水の一部をガニセを通して下の田に落とすわけです。そのため田んぼは水たまりができません、稲刈りのころには乾田になります。

田の土は強力な粘土のため、耕作は大変ですが、お米は非常においしく新潟の魚沼産にも劣らないおいしいお米です。棚田には毎日のように全国各地から棚田ツアー客、写真愛好家のみなさんがおいでになり、絶景の景色を満喫して帰られております。

春から秋までの作業には草刈り作業があります。年に五〜六回は、草刈りを行わなければなりません。私の田んぼは小さいものから比較的大きいものまで四十数枚あります。畦畔が高いので草刈り機でできないところは鎌での作業となります。

このような棚田ですが、年々高齢になって経験者が少なくなっています。できるだけ耕作し、放棄しないように頑張りたいと思います。

（羽尾五区・金井実）

明德寺で受賞記念公演

今年の四月、野本洋子さんが代表で続けてこられた読み聞かせの活動が、文部科学大臣表彰をいただきました。名前は「かたりべの会（活動の核で羽尾の民話の創作編集や、発表活動をリード）」、「コネット更級朗読の会（学校をはじめ、市内各地での朗読発表に取り組んでいる小学生グループ）」、「PTA朗読の会（学校での読み聞かせボランティアから勉強しているグループ）」と分かれていますが、違う世代でも取り組んでいる内容は同じです。県内でも読み聞かせの活動をしてい



（更級小学校長・伊藤可主也）

るグループは多々ありますが、この活動が文科大臣表彰を授かる理由は十分にあります。一つは、子どもたち自身が朗読練習し、読み聞かせに取り組んでいることです。明朗に聞こえる練習、適切なイントネーションの練習などを積んで、下級生の前で発表する姿は頼もしいです。もう一つは、郷土の民話をテキストとして使っていることです。もう親御さんたちも使わなくなった温かな方言にあふれている朗読が発表会ではいつも好評です。

上の写真は文科大臣表彰を記念し羽尾の明德寺で六月二十六日、行われた朗読劇の一場面です。まさに地域の文化を繋ぐこの活動が今後も続いていくことを願っています。

さらしなの地酒、いかがですか？

さらしなの里の吉野地区では今年、初の試みとして酒米が耕作されました。美山錦、それは長野県生まれの酒米です。棚田が広がる吉野地区は、弁天清水の伏流水と強粘土質の土壌、夜屋の寒暖差が総合して、おいしい米ができます。

このような環境で酒米を作り、耕作水と同じ三峰山の仕込水で酒を造ったらおいしい酒が出来そうだね、と吉野営農推進協議会の場で話題にあげられました。この協議会は共同田植え（播種から植付）を主事業とする中で、楽しくおいしい米づくり、農作



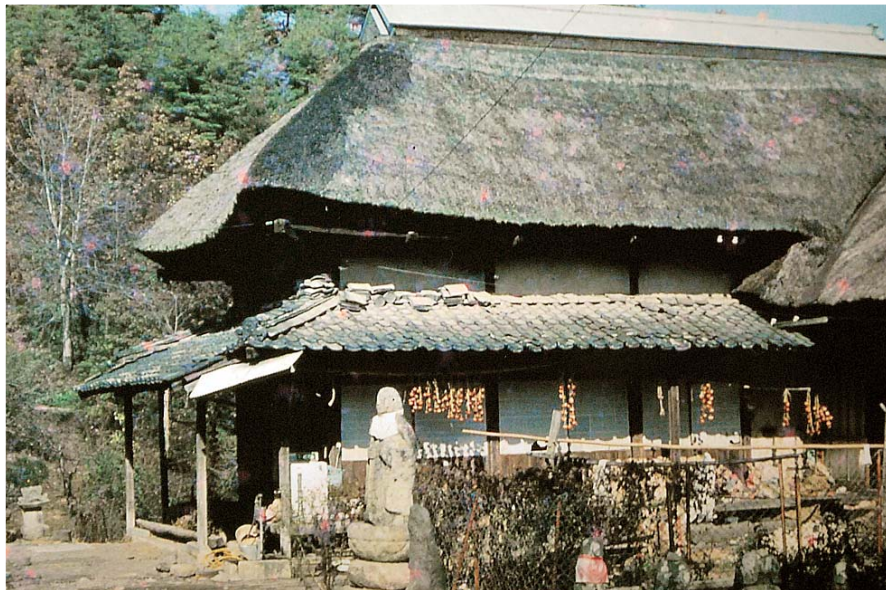
業の効率化、仲間づくり・後継者育成、減対策等の取組と活動をしている仲間集団です。明治時代、地元には「月の井」という酒蔵（初代更級村村長宅）もありました。

この春の総会で、地域おこし・減対策・環境保護にも通じる活動として参加者を募り、さらしなの地酒造りグループ「吉野醸楽会」を結成しました。早速千曲市八幡の江戸時代創業の酒蔵「長野銘醸」に相談したところ、新しい試みとして蔵開放に対応したいと同意をいただき、吉野地区産米のオリジナル酒実現の道が開かれました。

写真は田植・刈取りの作業風景です。上手に作りすぎて、半分倒伏しました。稲丈はコシヒカリよりも長く、粒も一回り大きいです。酒蔵ではこれから、米の仕込み準備が始まります。吉野醸楽会としては、香り高く芳醇な純米吟醸酒を目指していきます。ラベルデザイン・名称を応募により決定する時期に来ており、これも会員の楽しみです。来春、田植えのころには、樽より瓶に移され完成となります。ただいま予約受付中（720円/瓶）です。

（羽尾五区・森政教）

竈や風呂の炎と同じ温かみ



平安貴族は、生きているうちは薬師
如来の救いを求め、死後は阿弥陀の浄
土への往生を願ったという。羽尾には
薬師堂と阿弥陀堂の双方があり、それ
ぞれ古い歴史がある。阿弥陀堂に限っ
て言えば、鎌倉時代には存在していた
ということだが、確かな文献はまだ見
たことがない。

その炎を見ていると何となく安心でき
たのよね。新しい暖炉の炎は温かみに
欠けて… というくだりがある。今は
無住で古びた阿弥陀堂であるが、お堂
の姿を見ると、郷愁と安堵を感じるの
は、まさに「竈や風呂の薪の炎」と同
じ温かみがあるからではないだろうか。
明治維新の廃仏毀釈で堂守は還俗し、
現在は本田三組共有の財産として管理
されている。戦前はここで、この地に
嫁いだ女性たちが土地の料理や習慣を
覚え、愚痴を語り合う念仏会



を開き、家長は互助目的の講
組織として助け合い、青年層
は共有田畑で稼ぎ、種々事業
をしてきたという。武水別神
社の大頭祭につきものの羽尾
の軍楽隊もその一つであった



と聞く。このような住民の抛り所は当
然のことながら子どもたちにとっても
遊びの場所であり、忙しい親の代わり
に年長が年少者の面倒をみる姿が終戦

羽尾・阿弥陀堂の思い出

二本（写真右
上）が住民の

後のしばらくの間も見る事ができた。
自分もそんな中で育った一人である。
肥やしを積んだりヤカーがたまに通る
道路も、地蔵の横に生えていた杏の大
木も遊び場であり道具であった。これ
をいつも見守ってくれたのが、堂守を
兼ねた借住の家族であった。暑い日に
は阿弥陀様の前で昼寝をさせてもらっ
た。こんな光景は今ではとても見るこ
とのできない風景である。

往来を確保する仮橋として活躍して
いた。地元の生活に密着し、存在して
きた阿弥陀堂であるが、近年は年に一
度の総会の集まりさえも、この建物で
きかないのが残念である。

最上部の写真は、昭和50年ごろ、堂
守の家族が住んでいたころの阿弥陀堂。
その下は現在の阿弥陀堂。最下部の写
真は阿弥陀様と念仏会で使った鉦と数
珠。鉦と数珠は今も地域の法事で使わ
れている。

また、長老が「クラブ」と言う共同

（羽尾四区・北村主計）

おらほの冠着

23

勉強の広場だった「山の神」



春の雪解けを待ちかねてのフキノトウに始まり、ゼンマイ、ワラビ、山ウド。盆近くになると、桔梗、オミナエシ、ワレモコウなど秋の七草が取れ、盆花として仏壇に上げたものです。八月末ごろからは、秋の山菜取りが楽しみでした。アケビ、山ウドなど。特に松茸は親兄弟にもある場所は教えなくらい秘密にしています。山菜・草刈り薪取りと玉の山でした。

終戦直後の楽しい思い出は坊城平でのキャンプです。今のような設備があるわけではなく、手作りでした。草、ボヤを切つて、平らなところに萱を敷き、テントを張りました。今のように軽いものではなく布でできた重いものでした。苦勞して坊城平に担ぎあげ

ました。荒縄や藤ツルなどを使い完成させました。夜は藪蚊に悩まされましたが、



それでも楽しい一夜を過ごすことができたことを今でも忘れません。

水は、水の湧きそうな場所に穴を掘って炊事用、飲み水、洗面用に使いました。そんな水を飲んでお腹をこわしたり、気持ちの悪くなった人はいませんでした。みな丈夫な身体にできていました。

当時は指導者として青年団の人が四、五人手伝っていた記憶があります。みんな貧しかったが楽しかった。長年続いた更級小の坊城平でのキャンプも今年が最後と聞きました。時代の流れで仕方がないとはいえ、残念に思います。

冠着山の思い出はなんといいても、山の行き帰りに息入れた山の神です。砂防ダムができ景観が変わってしまったが、石のころごろした川で鎌を研いだり顔を洗ったり、広場では大人の世間話を聞いたり、いろいろなことを教

えてもらう勉強の場でもありました。今は人影もなく松の太木と祠だけが昔の面影を残しています。祠の屋根の部分には深く刻んだ線があります。あれは山仕事で傷んだ鎌の刃先をここでも研いだ跡です（左上の写真）。

今は車が通る林道ができて、昔の山道は藪になってしまっています。でも、山の神の上方には「おば岳」「ウトウ（鵜頭？）」「三ヶ月ごろろ」「地味王」「観音峠」など命名の由来に興味があるポイント

がいくつもあります。坊城平までの行程で一番の難所と思われた「中尾根」の下の小さな川には山椒魚も住んでいました（山椒どじょうとも言っていた。藪の中で今でも生息しているかなあ）。

三ヶ月ごろろも屏風岩も樹木などで覆われあまり見えなくなりました。冠着山が美しい山に蘇ってほしいと思います。石川啄木の詩に「故郷の山に向かいていうことなし。故郷の山はありがたきかな」とあります。私たちにとって冠着山はそんな山なのかもしれません。

（仙石区・金井信夫）

【編集部注】右の写真は昭和37年ごろの元旦の冠着山頂。同24年のキティ台風で折れてしまった2本のブナの1本と思われる木が映っています。手前は金井さんの兄志郎さん。歴史的に貴重な写真なので金井さんからお借りしました。

資料館だより

さらしなの里へ赴任してから半年がたちました。感じたことがあります。現代の大半のサラリーマンは、事前に組まれたスケジュールに沿って毎日仕事をしています。私もその一人ですが、ここでの仕事は自然の力に左右されることが多く、スケジュール通りに進まないことが多々あります。今年は異常気象のせいもあり、農作物の生育不順や予定外の毛虫の駆除、池清掃の日程変更など、何度となく天候に悩まされました。自然の力を思い知らされたと同時に、縄文人は精確に自然を肌で感じ取り、柔軟に歩調を合わせながら生きていたのだと思いました。そして彼らは、自然は恐ろしく偉大であり、人間はその自然によつて生かされているにすぎないと理解していたからこそ、恵みを与えてくれる自然に深く感謝して祈りを捧げていたのだと思いました。（学芸員・西澤奈津子）

【編集後記】姨捨の棚田は、国の重要文化的景観に選定され、さらに注目が高まりましたが、耕作者の多くが羽尾（旧更級村）の人たちであるとは知りませんでした。観光ポスターで最近、四季折々の景観として紹介されるスポットはトップページに掲載した金井実さんが耕作している棚田です。さらしなの地酒が「月の井」以来、ほぼ百年ぶりに来春、誕生します。どんな祝賀会になるか▽羽尾・阿弥陀堂と冠着旧登山道は写真撮影のため北村さんと金井さんに往時の姿をお聞きしながらご案内いただきました▽今号から歴史資料館のスタンプによるコラム「資料館だより」が始まります。

編集・発行

さらしなの里友の会だより編集委員会

事務局・さらしなの里歴史資料館

〒三八九・〇八二二

長野県千曲市大字羽尾二四七の一

電話 〇二六（二七六）七五一

Fax 〇二六（二六二）四一六一